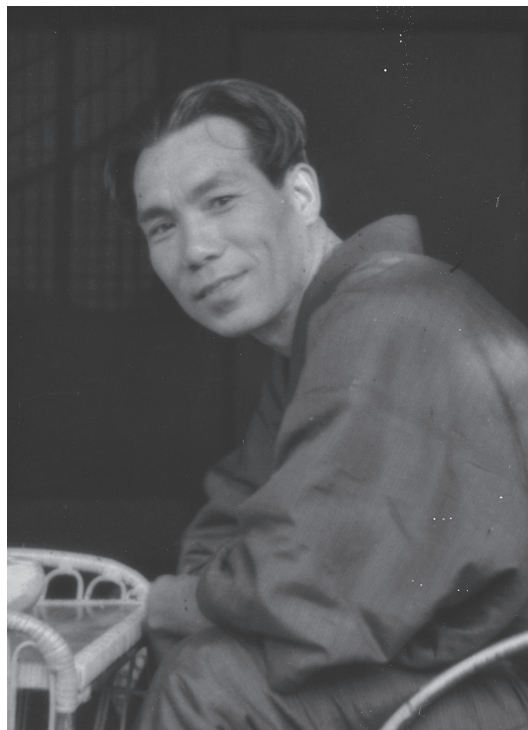


写真家・塩谷定好の物語

葛谷典子（島根県立美術館主任学芸員）



塩谷定好 45歳 三朝温泉にて

塩谷定好 年譜

1899年	10月24日 鳥取県赤碕村（現・東伯郡琴浦町赤碕）に生まれる。	1938年	ベスト倶楽部を「写研会」と改名する。
1912年	倉吉農学校（現・倉吉農業高等学校）入学。 この頃、「ヴェスト・ポケット・コダック」カメラを買ってもらう。	1945年	終戦
1917年	同校卒業。同郷の画家・前田寛治に憧れ、芸術写真の道に進む決意をする。	1971年	「塩谷定好作品展」9月24日～28日、赤碕町農業管理センター、約200点出品。 「塩谷定好回顧展」10月1日～7日、米子アート・ギャラリーU。
1919年	「ベスト倶楽部」を創設し、精力的に活動を展開していく。	1975年	『ALBUM1923～1973 塩谷定好名作集』発行、監修：植田正治
1923年	長男・宗之助誕生	1979年	「今日の日本の写真とその起源」展、1月13日～2月15日、ボローニャ近代美術館、イタリア。塩谷作品は異例の50点。その後、欧州主要都市12か所巡回。
1925年	島根半島に撮影旅行に行く。8月3日～6日。 前田寛治「滞欧作品展覧会」12月15日・16日、倉吉町打吹公園内図書館	1981年	フォトキナ写真展企画者マンフレート・ハイティング、赤碕の塩谷を訪ねる。
1926年	沖泊を撮影した《漁村》が、『アサヒカメラ』創刊号で募集された第1回月例懸賞第四部一等となる。同地を撮影した作品が他誌にも次々掲載される。	1982年	フォトキナ写真展「写真1922～1982」9月17日～10月12日、ケルン、西ドイツ。フォトキナ栄誉賞を受賞。
1927年	次男・玲二死去。深い悲しみに沈む。菩提寺・海蔵寺に通うようになる。	1983年	日本写真協会功労賞受賞。 第1回地域文化功労者文部大臣表彰
1928年	「日本光画協会」結成。京都の山本牧彦が会長となり、塩谷も参加。	1984年	『ニコサロンブックス-10 塩谷定好写真集 海鳴りの風景』刊行。
1930年	《三人の小坊主》『藝術寫眞研究』掲載。高い評価を受ける。	1988年	第2回国際写真フェスティバル「フォト・フェスト'88」2月26日～3月25日ヒューストン・センター、アメリカ。海外での初個展、米国内7会場を巡回。
1931年	「独逸国際移動写真展」が東京・大阪で開催。新興写真が急速に広まる。		10月28日 89歳の生涯を閉じる。
1934年	「第1回中国写真美術展覧会」赤碕町小学校、ベストクラブ主催、審査員：京都・山本牧彦、鳥取・塩谷定好。中国5県と兵庫県から714点出品。	2010年	琴浦町名誉町民受賞。
		2014年	塩谷定好写真記念館が琴浦町に開館。

掲載作品は、塩谷定好作

*拙著「夢の騎 塩谷定好1899-1988」、「夢の騎 塩谷定好1899-1988」（求龍堂、2019）所収、拙著「愛しきものへ 塩谷定好1899-1988」、「愛しきものへ 塩谷定好1899-1988」（島根県立美術館、2017）所収を参照した。

発行：島根県立美術館 2024年1月18日
島根県立美術館 © 2024

表紙：塩谷定好 32歳頃、1931年頃
米子写友会記録より（部分）画像協力：米子市美術館

*この冊子は「ふるさと島根寄付金事業」によって作成されています。



〒690-0049 島根県松江市袖師町1-5
TEL:0852-55-4700 FAX:0852-55-4714
<https://www.shimane-art-museum.jp>



《漁村》1925(大正14)年 島根県立美術館蔵

写真の道に進むのを応援する、文化にも理解が深い家だった。現在、生家は「塩谷定好写真記念館」となっている。

定好は13歳の頃、最新の小型カメラ「ヴェスト・ポケット・コダック」を購入してもらった。この男性用のベストのポケットにも入るほど小型で軽量のカメラは、イーストマン・コダック社から発売されると同時に世界中に広まった。このカメラに単玉レンズが附いた通称「ヴェス単」は、やがて塩谷の愛機として、独特の軟調描写をもつ数々の名作を生み出すことになる。

塩谷は、三歳年長の同郷の画家・前田寛治に憧れ、「前田寛治さんが好きで、しっかりとデッサンされ描かれていても、回りがなんとなくパワー」とした前田さんの絵、ピン、フワといったあのベス単のレンズの味と同じだ。よし、やっただと写真の道にすすんだんだ」と後年語っている。こうして、塩谷は「芸術としての写真」を自



《海岸小景》1925(大正14)年 島根県立美術館蔵



《村の鳥瞰》1925(大正14)年 島根県立美術館蔵

写真雑誌に入選を重ねた塩谷は、1926年に『アサヒカメラ』が創刊されると第1回月例懸賞第四部で、見事全国一等を獲得する(1926年6月号)。その作品《漁村》は、島根半島多古鼻の沖泊を撮影したものだった。

1925(大正14)年8月3日から6日にかけて、写真4人と島根半島を巡り「三日間、死ぬ思いして撮った(中略)宿屋もなく、ゴザをまとい、ただただ歩いた。やっと、ありついたアヒルの卵入りのライスカレーがうまかったなあ」と、後年述懐している。その海岸の美しさを塩谷は生涯忘れることはなかった。

島根半島北岸は、『出雲国風土記』に「国引き」の神話として語られる山塊の先端にあたる。日本海の荒波を受け、断崖や海食洞、海食台が随所に形成される景勝

地であり、入り組んだ山道を進むと眺望が開け、リアス式の明媚な海岸が広がる。境港から美保関にわたり、七類、沖泊、小波、加賀と撮り進めるが、なかでも最も集中して撮影したのが沖泊だった。

日本海を見晴らす断崖と、手前の山塊に囲まれた谷間に、沖泊の村はある。すり鉢のような急な斜面に螺旋状に道が続き、様々な方向を向いた家並が連なる。その集落を塩谷は1925年8月に撮影した。そして、翌年3月以降に発表していくまでの、印画を仕上げていく期間は重要な意味をもった。この間、12月5日・6日に前田寛治が郷里で帰国展を開催しているのである。前田は、東京美術学校を卒業すると郷里の多くの人々の支援を受けてパリに留学しており、1925年に帰国して故郷で滞欧作品展を開催した。そこにはパリで学んだキュビズムの手法を取り入れた屋根並みなどの作品が展示された。塩谷は衝撃を受けたに違いない。塩谷は画壇の新傾向を取り込み、前衛的な作品を生み出していく。

その成果は注目を浴びた《漁村》は、前述の通り『アサヒカメラ』月例懸賞一等の快挙を遂げたのみならず、『藝術寫眞研究』(1926年3月号)、1926年版の『日本写真美術年鑑』、『アルス写真年鑑』の口絵も飾った。沖泊の連作はその年の芸術写真を代表する作品のひとつとなったのである。塩谷定好の名は全国に

2 島根半島撮影の旅



塩谷定好写真記念館(外観)



塩谷定好写真記念館(玄関)

「前田寛治さんが好きで、しっかりとデッサンされ描かれていても、回りがなんとなくパワー」とした前田さんの絵、ピン、フワといったあのベス単のレンズの味と同じだ。よし、やっただと写真の道にすすんだんだ」と後年語っている。こうして、塩谷は「芸術としての写真」を自



《静物》1925(大正14)年 島根県立美術館蔵

日本海の大海岸が広がる景色を、塩谷定好(しおたにていこう)1899(明治32)年1988(昭和63)年は終生眺めて過ごした。突堤のほかは遮るものもなく、塩谷家の二階からは、水平線はるかに見渡せる。潮の香りをはらんだ風が吹き、雲間を洩れる夕陽が美しい節色に彩る、時の移ろいとともに千変万化する光景を、塩谷は見つめ続けた。

鳥取県赤碕村(現・鳥取県東伯郡琴浦町赤碕)で廻船問屋を営む塩谷家は、北前船・蛭子丸で北海道まで航海する勇壮な気風をもっていた。一方、国の登録有形文化財となる塩谷家住宅を建設し、長男である定好が

写真の道に進むのを応援する、文化にも理解が深い家だった。現在、生家は「塩谷定好写真記念館」となっている。

定好は13歳の頃、最新の小型カメラ「ヴェスト・ポケット・コダック」を購入してもらった。この男性用のベストのポケットにも入るほど小型で軽量のカメラは、イーストマン・コダック社から発売されると同時に世界中に広まった。このカメラに単玉レンズが附いた通称「ヴェス単」は、やがて塩谷の愛機として、独特の軟調描写をもつ数々の名作を生み出すことになる。

塩谷は、三歳年長の同郷の画家・前田寛治に憧れ、「前田寛治さんが好きで、しっかりとデッサンされ描かれていても、回りがなんとなくパワー」とした前田さんの絵、ピン、フワといったあのベス単のレンズの味と同じだ。よし、やっただと写真の道にすすんだんだ」と後年語っている。こうして、塩谷は「芸術としての写真」を自

らの道として選り邁進していった。

20歳を前にした1919(大正8)年、塩谷は写真倶楽部「ベスト倶楽部」を創設した。月例会・撮影会・年1回の展覧会など、その後精力的に活動を展開していく。

大正末から昭和初期「芸術写真」と呼ばれる絵画のような写真が一世を風靡した。全国に写真クラブが結成され、写真雑誌も創刊された。塩谷の作品が最初に写真雑誌に掲載されたのは、『藝術寫眞研究』(1925年1月号)の《静物》である。この時期創刊された『藝術寫眞研究』や『カメラ』の編集であり、毎月開催される全国コンクール「月例懸賞」の選者だった中島謙吉は、塩谷の才能をいち早く見出した。

3 玲二の死と海蔵寺

1922(大正11)年に塩谷は結婚し、翌年長男・宗之助が生まれた。そして1926年には、次男・玲二が誕生する。しかし、その喜びもつかの間、わずか3か月で玲二は亡くなる。塩谷は悲しみに沈んだ。

「子供を無くして見ないと、ほんとうに子供を無くした心持はわからない。子供を無くした私はいつか知らない間に宗教方面を研究し始めた。」

塩谷は菩提寺である自宅近くの曹洞宗・海蔵寺に通う様になった。やがて、和尚と小坊主たちを撮影し始め、とりわけ、得度したばかりの15歳の大覺を集中して写していった。大覺は、和尚の6人の子供たちと兄弟のように暮らしていたが、海蔵寺に来てまだ1年も経つ

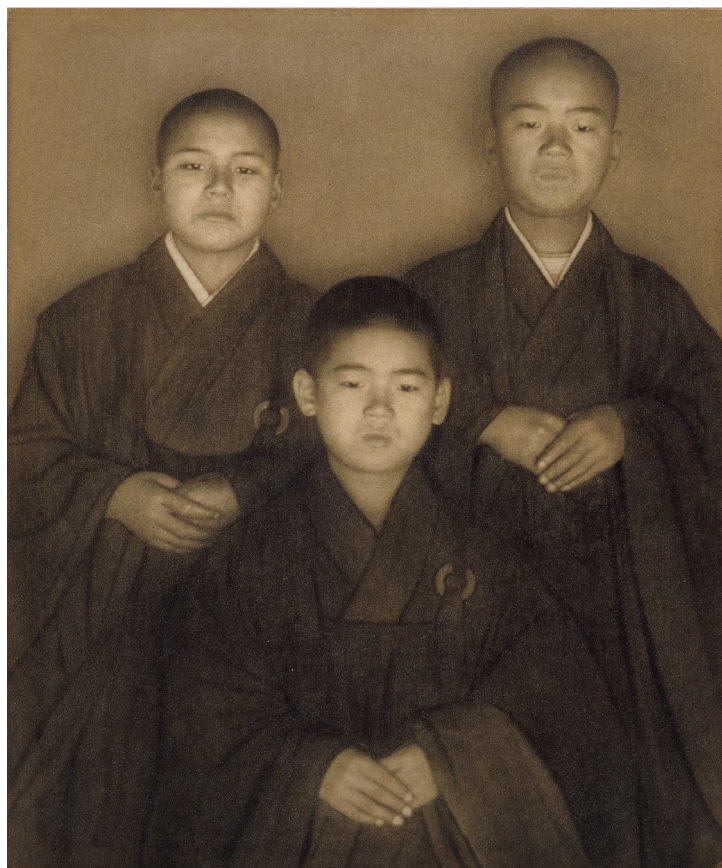
ていなかった。大覺の深い寂しさを湛えた端正な顔立ちと気品ある佇まいが塩谷を惹きつけたのだろうか。《手盤しゅばんを持てる小坊主》、《木魚を持てる小坊主》など多数の作品を制作し、写真雑誌の誌面を飾っていく。

そして、《小坊主座像》、《三人の小坊主》が『藝術寫真研究』に掲載されると、全国の写真家たちに大きな感銘を与えた。「このふたつの印画は当時の誌友を魅了し去った。私の脳裏に、塩谷定好の名が焼き付いて忘れ難くなったのもこの時である」と評された。作家の眼差しと小坊主たちの眼差しが、静謐な空間のなかに凜として溶け合っている。小坊主シリーズは塩谷の代表作となる。

この時期、塩谷は自身の子供たち、宗之助や優子の肖像も写している。「子供こどもの無邪気な天真さは、子供好きな自分をい

つも喜ばせてくれる」。子供たちの輝くような生命感
は、次第に塩谷の悲しみに沈んだ心を慰めていった。
塩谷は、自らの愛児たちや海蔵寺の小坊主たちの無邪
気な天真さに惹かれ、癒され、そこにかげがえのない
生命の輝きを見出したのだろう。塩谷の作風は、その
生命をまっすぐに捉えたものとなっていく。「被写体
に潜む生命」を描出し、作品は思索の深度と内省的な
豊かさを増していく。

「形の面白さとか、明暗の面白さとか、そういうものも
勿論大切なわけでありますが、私達の写真では、唯そ
の外形だけを描いたのでは駄目です。そうした形の面
白さとか、光の明暗の面白さとかを通過し、而してそ
の被写体の内部に潜んだ生命を掴んできて、それを表
現するというようにしなければなりません。」



《三人の小坊主》 1929(昭和4)年 横浜美術館蔵



《手盤を持てる小坊主》 1929(昭和4)年 島根県立美術館蔵

4 蠟燭油煙修整

小坊主シリーズなどの代表作が生まれる30代初め頃は、塩谷が赤碕のベスト倶楽部での活動のほか、全国組織である写真団体「日本光画協会」のなかで活躍する時期と重なる。

「日本光画協会」は、1928(昭和3)年、京都の山本牧彦を会長に設立された。中核をなす作家、山本牧彦、高山正隆、渡邊淳、塩谷定好らは、写真雑誌の月例懸賞で中島謙吉にその才を見いだされていた。いわばこの第一世代の写真家たちが、次世代の新たな才能を引き出し、日本光画協会は全国規模でその裾野を広げていったのである。

同会は、洋画壇の前衛的な作風を取り入れ、特に生活心情や作者の内面性の表出という表現主義的傾向をもった。引伸の際に対象を極端に歪めるデフォルメ、画像の上にメデイウムを塗り油絵具を塗布する「雑巾がけ」といわれる手法、また極端な引伸しによる粒子の荒れ、「ヴェス単フードはずし」といわれる独特の滲みをもつソフト・フォーカス表現などによって、作者の内的ヴィジョンを画面に吐露しようとした。

山陰で塩谷定好は圧倒的な存在だった。次世代の植田正治が写真をはじめたばかりの頃、写真雑誌の月例懸賞に次々と入選して口絵頁を飾る先達・塩谷定好

は、「まるで神様の
ような存在」だっ
たと記している。

「2cm四方を仕上
げるのに1日かけ
るそうだ」などの
数々の塩谷神話が
生まれていった。
それが、単に神話
ではないことを、
塩谷の残した言葉
が証明している。

塩谷によると、
ネガを引伸してプ
リントすると、水
彩絵具でスポッ
ティングし、粒子の
大きさ等を揃え、



《児女と静物》 1932(昭和7)年 島根県立美術館寄託

黒い箇所は削り針で丹念に削り取る。次に、メデイウムを画面全体に脱脂綿で塗る。白いタイルに蠟燭の火焔をかざして箒かきを取る。これは「蠟燭油煙修整」という塩谷独自の方法である。油絵具の黒・青・セピアの三色とメデイウムをタイルに置き、蠟燭の箒を少量入れてパレット・ナイフで充分混合し、印画の色調と一致した
ら、必要な個所に、細かい部分は爪楊枝の先に脱脂綿を巻いて、絵具を塗ったり拭い去ったりして仕上げていく。三晩くらい放置して充分乾燥した後、蠟燭の箒をさばき筆に少量ずつ付け画面を軽く掃く様に調整して仕上げていく。

こうして塩谷は、日本光画協会の手法とともに、自ら考案した「蠟燭油煙修整」という独自の方法で、深く暖かく豊かな翳かげの広がる美しい印画を生み出していた。



《少年》 1929(昭和4)年 島根県立美術館蔵

5 海に挑む

塩谷が生涯を過ごした赤碕の生家は、日本海を望む海辺にある。少年時代から変わることない「私の海町」と称するこの街は、北面に日本海、南面には断崖、東と西にうねりながら連なる長い一筋の道が続いている。その海沿いの道に面した塩谷家の二階からは、日本海が一望できた。塩谷の海を写した傑作は、この広い窓辺から数多く生まれている。海辺で働く人々や水浴に興じる子供たちなど「人間の生活から醸される情味を主とした情景」を多く写してきた塩谷は、次第に「人間味を含まない所謂大自然の威力を示す姿」へと肉迫していった。塩谷にとって、「海」という存在そのものが重要な主題となる。

「まことに海は感情的ないつも心の動揺しつつある人のように、常にその表情を変えています。喜ぶかと思えば怒る、泣くかと思えば笑う、ほんとにとりとめもないのは海であります。（中略）あらゆる自然は悉く生



《海辺小景》 1928(昭和3)年 島根県立美術館蔵

命をもつが、殊に海はその生命の現はれが著しくその生命がその表面に出て、盛に活動している、この動きつつある生命を描く事が、海の描写において最も大切なことであると思うのです。」

嵐の中、難破した船がようやく岸に辿り着いた瞬間を捉えた《破船》は、船とそれを見守る人々の間に緊迫感が漂い、怒涛逆巻く大海原と暗雲垂れ込める空を大きく、翻弄される船と人々を小さく捉えて、大自然の脅威を強調している。海難・龍巻・荒海など、海という自然の猛威に直面しつつ、深い自然観照によって自然の内奥に溶け込むような表現世界を創り上げていった。

「自然の生命を自分に通し自分の生命を自然に通す、自然と自分とが渾然として一つになるという域に至らねばならぬ、これは自然描写についてとても大切な事であると思うのです。」



《天気予報のある風景》 1931(昭和6)年 島根県立美術館蔵



《破船》 1929(昭和4)年 個人蔵

戦後の再評価

芸術写真がまさに頂点を極めた1930(昭和5)年頃から、新たな波が押し寄せてきた。クローズアップ、俯瞰・仰瞰撮影、フォトグラム、フォトモンタージュなど、カメラの精緻な描写力を駆使したモダン・フォトグラフィが「新興写真」という名のもとに一挙に広まり、写真表現は変貌を遂げていった。

多くの芸術写真家たちが、この時代の激変の中で混乱した。芸術写真は、「サロン芸術」と批判されるようになる。そのなかで、塩谷は自らの道を模索し、これまで積み上げてきた芸術写真の世界を捨てることなく、新たな表現に比肩する強さを求めて怯まず挑戦していった。

そして、塩谷は一連の注目すべき作品群を生み出していく。細部の描写を省略し、濃淡の諧調による画面構成のみに集約されたかのような夢幻の世界を創り



《静物》 1931(昭和6)年 島根県立美術館蔵

上げた。翳が形を創り上げ、情趣に富む深遠な心象風景へと深化している。

《雪日》では、草むらは淡い翳となり、遠くに霞む木々も、そのなかに溶け込んでいく。浮遊する濃淡が美しい陰影を作り上げ、「翳」は塩谷定好の表現の鍵となる。懐かしさを喚起する記憶のなかの光景そのものが、命を宿しはじめる。

しかし、新興写真の勃興から戦後写真の展開へと写真表現が変遷するなか、塩谷の名は次第に忘れ去られていった。そのなかで植田正治や写研会（ベ



《雪日》 1929(昭和4)年 島根県立美術館寄託

スト倶楽部を改名)のメンバーの尽力により、1975(昭和50)年、『塩谷定好名作集…1923-1973』が出版された。この写真集の刊行が重要な契機となり、塩谷の存在が海外でも注目されはじめる。1979年にイタリアで開催された「日本の写真 その起源から今日まで」展は、海外ではじめて日本の写真

を歴史的に紹介する大規模な展覧だった。塩谷の出品は、全400点の中で異例の50点にものぼった。さらに、1982年に、フォトキナ写真展として開催された「写真1922-1982」展（西ドイツ、ケルン美術館）では、エドワード・ウエ

世界の巨匠とともに、塩谷定好が選ばれ、フォトキナ栄誉賞を受賞した。その後も、「フォト・フェスト88」(ヒューストン)では海外初の個展が開催され、国内でも日本写真協会功労賞を受賞している。

塩谷の再評価がますます高まる最中、1988(昭和53)年10月28日、塩谷は89歳の生涯を閉じた。

塩谷の作品が、時代を超え、国を超えて、多くの人々の胸を打つのは、その普遍的な魅力と質の高さとともに、「自然のこころを、わたしの心として写す」という写真に対する塩谷の真摯な思いと溢れんばかりの愛情が伝わるからではないだろうか。